

『酌酒與裴迪』 王維

現代世相を反映する心眼の詩

酒を酌んで裴迪に與う 王維

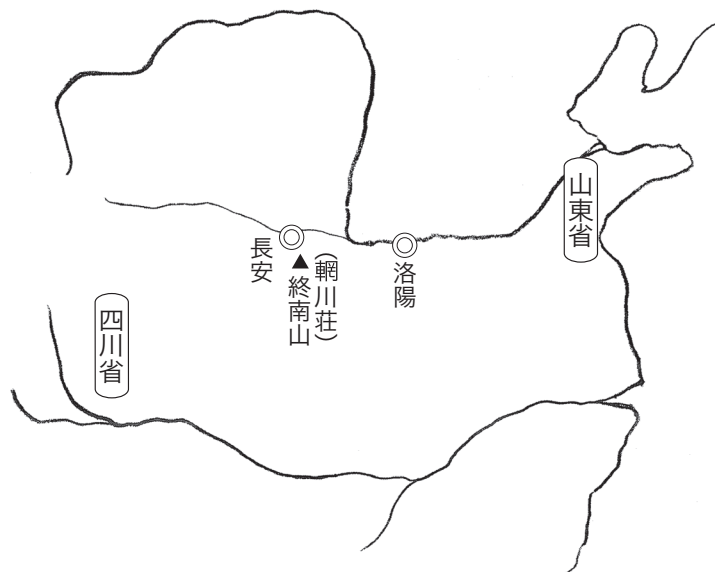
酌酒與君君自寬 酒を酌んで君に與う君自ら寛うせよ
人情翻覆似波瀾 人情の翻覆波瀾に似たり
白首相知猶按劍 白首の相知猶劍を按じ
朱門先達笑彈冠 朱門の先達彈冠を笑う
草色全經細雨濕 草色全く細雨を経て濕い
花枝欲動春風寒 花枝動かんと欲して春風寒し
世事浮雲何足問 世事浮雲何ぞ問うに足らん
不如高臥且加餐 如かず高臥して且つ餐を加えんには

作詩背景

この詩は王維が十六歳も年下の、若い詩友である裴迪を励ましたものである。裴迪はこのころ科挙の試験に凶らずも落第となり、面白くない時期であったようだ。勝手に想像させてもらうと、裴迪は自分よりさほど優秀でない人物が及第したのを知ったのかもしれない。科挙試験は確かに二重三重の厳重な試験規約の中で公正に行われるものであるが、多くの

カンニング事件も後を絶たなかったし、

最終段階の天子による面接試験になると出身・門閥が幅を利かせているというのも公然の噂であった。裴迪はそういう不正に気がついていたのである。た



だ自分が落第しただけの理由で落ち込むのではただの凡人にすぎない。そのところをもう少し知りたい。

一方王維は二十一歳で進士となり、中央政府の官職を得て順調なスタートであったが、翌年にはなぜか山東省に左遷される。以後地方役人を転転とし、張九齡によって見出されるまでは、決してエリートではなかった。従って裴迪の不運の痛みは十分実感できたのである。王維が都にもどったころ、長安の南方終南山のふもとに彼は広大な別荘地「輞川莊」を持ち、くつろぎの場を設けていて、近くに居を構えた裴迪と兄弟のように交遊していた。そのころの作とみてよからう。

意解

〈首聯〉（一・二句目）

君に酒を勧めたい。（まあ一杯やってくれ）そしてそう落ち込まないで、もう少し気を楽にするのがいいよ。（君の言うように）この世間の人情は軽薄で、くるくる変わるのは、まるで定めない波のようなものだからね。

〈領聯〉（三・四句目）

（昔から言うだろう）白髪になるまで親しいもの同士でも、（何か事が起こり、利害が対立すると、それまでの友情も吹き飛んで）たちまち剣に手をかけて相手を倒そう

としたり、朱塗りの門に居を構える身分の高い先輩役人は、（後輩を引き立ててくれるような態度をそれまでは示してくれていたものを）いざその時が来ると、冠の塵を払いつつその推薦を心待ちにしていた後輩の気持ちを考へもせず（まるで愚か者のように）あざ笑ったりしたということを。

〈頸聯〉（五・六句目）

（まあまだ君は若いから気がつかないかもしれないが、世の中を静かに見渡したまえ）庭の雑草のごときものでも春雨の恵みを受けてあのように青々と潤っているし、反対に枝に着いた美しい花がいよいよ咲こうとすると、それを恨むように冷たい春風が吹いて咲かせまいとする。（つまり、さほど優れてもいないものが上からの脚光を浴び、才覚有るものがかえってその芽を摘み取られるということとは昔から数えきれないほどあるのが世間というものではないかね）

〈尾聯〉（七・八句目）

だから世の中というものは万事が浮雲のようにはなく頼りにならないものだということだよ。何も（そんなあてもない世の中に、今さら悲憤慷慨して）問題にするほどのことはあるまい。それより、君、疲れているなら高枕をし

て横になってゆっくり暮らし、その上、健康が一番大切なんだから、御馳走をうんと食べて、身を大切にすることより大事なことではないよ。（さあしつかり飲んで、食べてくれたまえ）

付説

① 題目「白首相知猶按劍」に関して

「史記」鄒陽伝に「名月の珠、夜光の璧（たま）、闇を以て人に道路に投ずれば人剣を按じ相眄（かえり）みざる者無し。何となれば因無くして前に至ればなり」（どんな友人の間柄でも夜道に宝石が転がっていると、腕ずくでも自分のものにしたがる。なぜならわけもなく奪える範囲の目の前にそれがあるからである）とある。

② 題目「朱門先達笑弾冠」に関して

「漢書」王吉伝に「王吉字は子陽、貢萬と友たり。世に称す。王位に在れば貢公冠を弾くと。言うところはその取捨同じければなり」（王吉と貢萬は友人であった。世間の人とはみんな二人の間柄を褒め称えていた。王子陽が位に在れば、貢公は冠を弾いて仕官を待っている。その真意は相手を拾うか見捨てるかについて、心が通じていたからである）とある。「弾冠」とは役職に就く準備をしているという意味の慣用句。

③ 題目「不如高臥且加餐」に関して

「文選」古詩十九首に「努力して餐さんを加えよ」（遠征して帰郷のめどもないあなたはどうか体に気をつけて御馳走をしつかり食べて元気でいてください）という句の借用。

余説

裴迪はその後、科挙に及第し進士となり役人となったが、四川省など地方勤務が多く、詩人として有名な割には高級官僚には至らなかった。王維と裴迪が詩友であることはあきらかである。「輞川集」にある二十編の問答のような詩は、まるで親子のような交流ぶりが読み取れる。その中で、例の王維の「鹿柴」に応じた同題の詩を紹介する。

日夕見寒山 日夕寒山を見

便為独往客 便すなわち独往の客と為る

不知松林事 知らず松林の事

但有磨麴跡 但きんかだ磨麴の跡有り

広大な輞川荘の中には山有り川有りで鹿の住む林もある。磨麴は雄のシカで、夕暮れに山に行つて雄鹿の跡を見つけた作者はそこに何を感じたのだろう。

参考

① 世の人情が軽薄なことを歌う詩（前二句のみ）

「貧交行」杜甫（C4）

手を翻せば雲と作り 手を覆くがせば雨
紛々たる軽薄 何ぞ数うるを須もちいん

「事に感ず」于漬（A29）

花開けば 蝶も枝に満つ

花謝すれば 蝶ま還た稀なり

「長安主人の壁に題す」（A48）

世人交わりを結ぶに黄金を須もちう

黄金多からざれば交わり深からず

② 才能ある人物がなかなか世に見出されないことへの

詩文

「雑説」 韓愈

世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り。千里の馬は常に有れども、伯樂は常には有らず。故に名馬有りと雖も、祇ただだ奴隸どれいじん人の手に辱められ、槽檻そうけんの間に駢死へんしして、千里を以って称せられざるなり。（以下略）

「唐宋八大家文読本」

・伯樂……馬の良し悪しを見分ける名人／才能ある人を
見抜く名人／すぐれた指導者

・千里の馬……一日に千里も走る名馬／才能ある世人

・奴隸人……馬の世話をする下働きの人／才能ある世人を

見分けられない愚かな上司

・槽檻……飼えば桶のある馬小屋／凡人のいる職場

・駢死……くつわを並べて死ぬ／才能を発揮することな

く空しく死ぬ

・称……たた称える

（口語訳） この世の中には伯楽がいてはじめて千里の名馬が現れるのである。（この世の中には優れた指導者がいてはじめて才能ある人が世に現れるのである。）千里の名馬はいつもこの世にいるけれども伯楽はいつもいるとはいえない。（すぐれた人物は常にこの世にいるけれども、それを見抜き正しく指導するすぐれた人はいつもいるとは限らない。）だから名馬がいても、ただ名馬の扱い方を知らない下働きの人によって屈辱的な扱いを受け、馬小屋の中で空しく死んでいき、千里の名馬という名で称えられない。（才能ある人がいてもただ愚かな上司によって不適切な扱いを受け、俗世間のそれぞれの職場で空しく死んでいき、本来は人材であるのに、すぐれた人物だったと褒め称えられない。）

